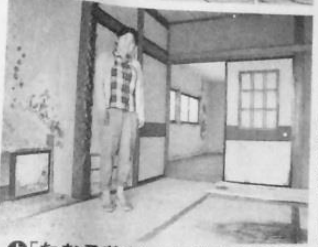


空き物件→交流拠点に

玉村町に移住した県立女子大生発案



①「たむろ荘」として改修予定の空き物件②改修予定の空き物件と「たむろ荘」発起人の本田美咲さん＝いずれも玉村町下新田

地域住民や学生が交流する憩いの場を作ろうと、県立女子大学の学生が、玉村町で使われなくなっていた空き物件を買い取り、交流拠点を作ると改修作業を始めた。「たむろ荘」と名付け、映画上映会や勉強会、カフェや飲食パーティーなど様々な用途での活用を呼びかけていく考えだ。今秋の完成を目指している。

改修始め秋完成へ

発起人は文学部3年の本田美咲さん(20)。長野県高山村から進学し、大学のあつ玉村町で一人暮らしを始めた。きつかけは様々な世代や所属の住民がいる街の特徴を知ったことだ。前橋市や高崎市のベッドタウンとして移り住んだ人や大学に通う学生、地元住民……。接点となる場所がないと感じ、「みんなが気軽に駆け込める場所をつくらう」と友人と乗り出した。かつてのメイン通り、役場近くの旧国道354号沿いに空き物件を見つけて法

既存の建物リノベ まちづくりにも活用

県方針

中小企業庁によると、全国で商店街の空き店舗率は13・17%(2015年度)。一つの商店街に平均で5・3店の空き店舗があるという。総務省によると、県内の空き家率(13年)は16・6%

6%で全国平均(13・5%)を上回り、ワースト9位だ。そうした状況の中、県は今年から、既存の建物や空き家を大規模に改修し、用途や機能を変えて性能を向上させる「リノベーション」によるまちづくりを掲げる。

2月には、まちづくりの専門家を講師に招き、商工会関係者や不動産所有者らを対象にした講座「まちづくり塾」を富岡市で開いた。遊休不動産を活用し、コンテンツ(産業)を生み

務局を訪ね、大家から約30万円で買い取った。学習塾や喫茶店として使われていた2階建てで居住スペースも併設されていたが、5年

以上使われていなかった。資金はインターネットのクラウドファンディングを通じて48万円を集め、屋根や壁、水道管などの改修費用にもあてる。将来的にはシェアハウスやゲストハウスとしての活用も考えているという。

本田さんは「垣根を無くし、地域に開かれた場所にしたい」といい、賛同者を募っている。問い合わせはメール(biue05410n@gmail.com)へ。

はるかな尾瀬～国道から消えた

音再現で補修費倍増断念

車が走ると尾瀬を歌った唱歌「夏の思い出」のメロディーが聞こえてきた、片品村内の国道401号から音が消えた。道路補修で音を出すための溝を削ることになり、再度、音が出るようにするには予算面で高額になるためやめたという。

県管理の道路に2008年度から設置された「ぐんまメロディーライン」の一つ。路面に細い溝を連続的に刻み、車が通過すると走行音が溝に反響して、溝の間隔の変化で音程が生まれる。県は速度抑制や居眠り防止にもなると、県内12カ所に設置してきた。

片品村に導入されたのは10年8月。曲は戦後の尾瀬プームの火付け役になった江間章子作詞、中田喜直作曲の「夏の思い出」で、尾瀬に向かう側の車線に刻まれ、登山者の期待感を盛り上げてきた。

県によると、路面にひびが生じたため4月に表面を削って再舗装する工事をしたが、音の再現には通常の数倍の1500万円程度かかるため見送ったという。

地元では「尾瀬の入り口にふさわしい工夫だったのに」「住民には必需品ではなく、仕方ないかも」と受け止め方も様々のようだ。(井上実子)

出す仕組みを学んだという。市町村や民間の連携を促し、空き店舗や空き家の活用による中心市街地の活性化を進める方針だ。専門家

や先進事例の紹介などで後押ししていくという。商政課は「使われていない資産を有効利用するリノベーションの考え方を広めていきたい」と話す。(仲田一平)

伝えるには共感が鍵

私学が、英語の入試問題で、ひめゆり学徒の証言を「退屈」と評した。

草津温泉の来客 新集計で15%増

4月分26万7千人 草津町は9日、草津温泉の4月中の来客数を発表した。算出の基礎データを実態に合わせて改めて最初の集計で、宿泊と日帰りを合わせた総数は約26万7千人と、旧データで集計した

り挟まない。「県」